

『古今和歌六帖』の本文と表現—デジタル校本の試み—

Text and Expression of Kokin Waka Rokujo:

An Attempt to Computer-assisted Construction of Annotated Textbook

福田 智子* 竹田 正幸** 南里 一郎†

Tomoko Fukuda Masayuki Takeda Ichiro Nanri

*同志社大学 文化情報学部, 京田辺市多々羅都谷 1-3

Doshisha University, 1-3 Tataratsudani, Kyotanabe, Kyoto

**九州大学大学院 システム情報科学研究院, 福岡市西区元岡 744

Kyushu University, 744 Motoooka, Fukuoka

†立命館大学情報理工学部非常勤講師

概要: 約 4,500 首の和歌を収める『古今和歌六帖』は、平安時代の歌語や表現の研究に欠かせない資料である。その主要伝本の電子テキストを作成し、新たに文字列データ解析ツールを開発して研究に活用する。伝本間の本文異同によって生じた複雑な書き入れを記述するための表記規則を案出し、改良を重ねた。現在、6種の伝本について入力作業を完了している。開発したツールは、書き入れから生成される本文をも対象とした検索・解析機能を備えており、これを用いて複雑な本文の整理と分析を試みる。

Summary: "Kokin Waka Rokujo", an anthology including about 4,500 classical Japanese poems, is indispensable material for studies on words and expressions in Japanese poems at the Heian era. Of its ancient manuscript copies which have survived to the present day, we focused on the most significant six, built up their electronic text files. There are a number of handwritten notes in each of the copies, and most of them describe text differences. We devised and improved a set of description rules for representing such complicated notes. We developed a software tool for analyzing them. The tool is able to find occurrences of user-specified keywords even in (virtual) text strings implied by the notes. By using this tool we try to analyze complicated texts of the anthology.

キーワード: 校本, 古今和歌六帖, 平安和歌, ハイパーテキスト上のパターン照合, ビット並列化手法

Keywords: annotated textbook, Kokin Waka Rokujo, Japanese poem at the Heian era, pattern matching in hypertexts, bit-parallel technique

1. 『古今和歌六帖』の伝本

十世紀後半に成立したと思われる『古今和歌六帖』は、我が国における最も初期の類題和歌集といわれる。『万葉集』や『古今和歌集』『後撰和歌集』、さらには私家集や歌合などから採歌、分類した歌数は 4,500 首にのぼり、平安中期の和歌研究のみならず、次世代の『源氏物語』をはじめとする王朝女流文学にとりこまれる和歌表現の集合体としても、重要視されてきた(注1)。

ところが、その一方で、『古今和歌六帖』に信頼できる古写本が存在しないというのも、周知の

事実である。すなわち、文禄四年(1595)の書写奥書を有する北岡文庫蔵永青文庫本が、確認できる書写年代の最も古いものであり、それ以前の古写本の現存はいまだ確認されていない。

また、『六帖』諸本の中でも、版本以前の「写本として伝存されていた時期の古今和歌六帖の古態を残す」(注2)といわれる宮内庁書陵部蔵桂宮本(以下、「桂宮本」と略す)においてさえ、『古今和歌六帖』諸本の本文の乱れについて、次のように述べる。

すへてこの六帖いかにやらんいつれもくみな
かくのみしとけなきものにて侍れは本のまゝ
にしるしをく。のちに見ん人心えさせ給へし。

第一帖奥書(注3)

もとより約4,500首という大部な歌集である。
このような諸本の現存状況の上、複雑な書き入れ
をもつ伝本も少なくない。整理すべき本文情報は、
膨大な量に上ることになる。

『古今和歌六帖』諸本全体を視野に入れた基礎
研究は、1960年代に活発に行われた。平井卓郎氏
『古今和歌六帖の研究』(明治書院、1964年2月)、
中西進氏『古今六帖の万葉歌』(武蔵野書院、1964
年6月)、そして『図書寮叢刊 古今和歌六帖』上・
下巻(宮内庁書陵部編、養徳社、1967年3月・1969
年3月)である。最後の『図書寮叢刊』は、桂宮本
を底本として、主要伝本の基礎研究を精緻かつ広
汎におこなっており、現在においても、『古今和
歌六帖』研究の基本文献である。

これらの『古今和歌六帖』全体論は、その刊行
時期からみて、いわゆる手作業で行われたことは
いうまでもない。そのような時代に、これだけ広
汎な伝本を視野に入れ、大量のデータ整理がなさ
れたことは、敬服に値する。

本研究では、近年発展が著しい情報科学の技術
を生かして、文学研究者と情報科学研究者との共
同研究によって、それらの先行文献の驍尾に付し、
『古今和歌六帖』全体論の新たなかたちの実現を
試みる。

2. デジタル校本という発想

『古今和歌六帖』に限らず、伝本研究において
は、一つの伝本を底本として定め、他本との本文
比較により異文を表示する、校本の作成が必要不
可欠である。これによって、諸本の本文異同を、
一目で具体的に把握することができる。

そしてさらに、研究者側の視点に立てば、どの
伝本に研究の主眼を置くかによって、底本を自由
に替え、他の諸本との本文異同を一覧したいとい
う要望が少なくないであろうことは、容易に想像
できる。だが、校本を紙媒体で作成するかぎり、
諸伝本中の一本を底本に定めれば、その後の作業
において、容易に底本を変更することはできない。

そこで、たとえば、久曾神昇氏編『古今和歌集
成立論』資料編(注4)のように、あえて底本を定め
ず、諸本本文を列挙するのみにとどめた本文集成
も編纂された。近年においても、頼政集輪読会(代

表:中村文氏『頼政集本文集成』(2009年1月)(注
5)は、PDF ファイルをCD-ROMに収録したものであ
るが、底本を定めず、諸本本文を列挙するという
体裁をとる。いわゆる校本のあり方からすれば、
本文異同を明示しないという点において退行して
いるともいえなくはないが、研究者の問題意識に
よって、中心とする本を替えて本文をチェックで
きるという点から見れば、必要に応じて底本を自
由に選びたいという要望から生まれた、一つのか
たちであるともいえよう。

そこで、紙媒体にテキストを固定するのではな
く、PCの画面上にテキストを表示することにより、
底本を任意に選択でき、本文異同も視認しやすく、
また、伝本を逐一増補できる、全く新しい発想のデ
ジタル校本システムを開発する。このシステムは、校本
画面の表示の他、和歌本文は、原態のままの表記
でも、清音仮名・歴史的仮名遣いに改めた本文で
も検索を可能にする。傍書によって生じる和歌本
文は、プログラムによって自動生成し、見せ消し
や補入記号の箇所も検索対象とする。つまり、あ
らゆる墨付きの検索に対応するものである。このデ
ジタル校本は、大量で複雑な伝本本文を効率的に処
理するという点で、実証的な文献学的文学研究をお
こなう際の利用価値は高い。諸本の本文異同を把
握し、作者(编者)自筆本により近い写本(原典)を
探求するとともに、享受史の観点から、後世の流
布本の性格を把握した上で、異同が生じた理由を
探り、書き入れをも含めた諸本本文の性格を総合
的に整理するための足掛かりをつくるのに大いに
役立つものと思われる。

3. 諸本原態の機械可読化

3-1. 作成したデータとその構造

現段階において、データの作成が完了しているの
は、次の6種の伝本である(注6)。主要伝本から、
本文系統の偏りがないように選択した。E)以外は
すべて写本である。A)は『新編国歌大観』(1984年
刊)の底本、また、E)は近世以降の流布本であり、
『続国歌大観』(1925~1926年刊)の本文は、その
系統に属す。

- A) 宮内庁書陵部蔵桂宮本
- B) 北岡文庫蔵永青文庫本
- C) 内閣文庫蔵「和学講談所」印本
- D) 内閣文庫蔵「江雲渭樹」印本
- E) 寛文九年版本
- F) ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵
黒川本

各伝本は、“katural.txt”“kanbun6.txt”というように、帖ごとに六つのテキストファイルからなる。

次にデータの構造について述べる。一首分のレコードは、下記のように7行で構成する。具体例は、本ページ下部に示した。

- | | |
|-------|------------------------------|
| [1行目] | 歌番号(『新編国歌大観』に依拠) |
| [2行目] | 題, 題についての書き入れ |
| [3行目] | 作者名, 作者名についての書き入れ |
| [4行目] | 歌本文A(原態のままの表記) |
| [5行目] | 歌本文B
(清音仮名・歴史的仮名遣いに改めた本文) |
| [6行目] | 左注, 左注についての書き入れ |
| [7行目] | 歌本文Aについての書き入れ |

歌番号は、『新編国歌大観』番号に対応したもので、伝本ごとの通し番号ではない。したがって、諸本間の歌順の相違により、歌番号が前後することがある。

また、題・作者名・左注についての書き入れは、それぞれ本行の本文の末尾にカンマを付した後に記す。歌本文Aの書き入れのみ、本行の本文とは別の行(7行目)に改めて記す。

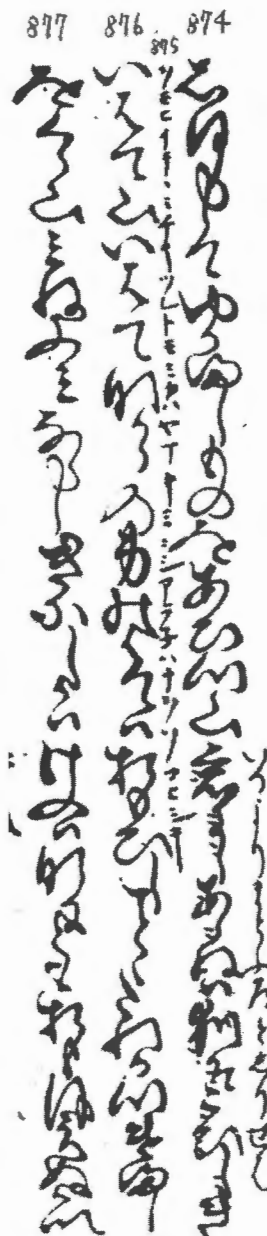
歌本文は、AとBを設ける。Aでは、原態の表記を可能なかぎり示す一方、Bは、清音仮名・歴史的仮名遣いに校訂した本文である。

3-2. 歌番号の扱い

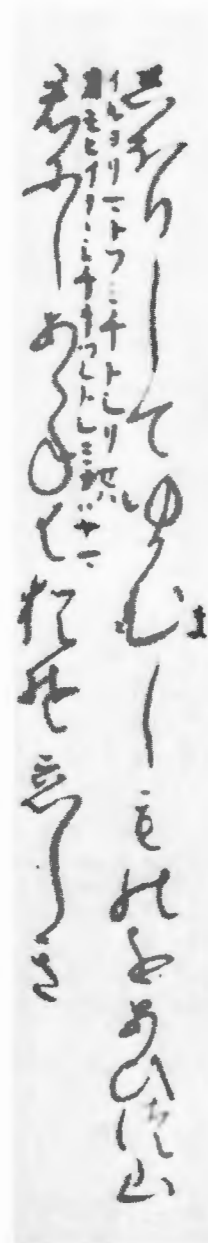
『新編国歌大観』所収の『古今和歌六帖』は、桂宮本を底本とし、その歌順に基づいた歌番号が付されている。現代の研究者にとっては基準となる番号であり、それゆえ、本研究で作成するデータに含まれる一首一首のレコードにも、その番号を振ることにした。

しかし、『新編国歌大観』は、底本の桂宮本を独自に校訂した上で歌番号を付している。伝本の原態から見ると、すべての歌を均質なものとして一律に扱うことはできない。

たとえば、右の桂宮本 875 番歌は、片仮名小書きによる書き入れである。本行は、平仮名に若干の漢字を混ぜた表記で、文字も大きく、書写の段



桂宮本 875 番



永青文庫本 874-875 番

階が明らかに異なっていることがわかる。そこで、書き入れ和歌の歌番号には、前に“\$”を付け、“\$875”とした。

とはいえ、このように一首全体が書き入れである例は、さほど問題にはならない。むしろ、さらに右に示した永青文庫本のように、本行の上句と

(例)「桂宮本」5 番歌

5

*

*

やま風に/とくる氷の/ひまことに/打出る浪や/春のはつ花

やまかせに/とくるこほりの/ひまことに/うちいつるなみや/はるのはつはな

*

s{古一春上},1[1-2]r{谷イ|たに}

下句の間に、下句と上句の書き入れがある場合は、データ作成の際に特別な処理が必要である。

この例では、874 番歌の上句と 875 番歌の下句で本行の一首が構成されている。だが、その行間に 874 番歌の下句と 875 番歌の上句が書き入れられているため、この片仮名小書きによって、本行の一首の歌が、二首に分かれてしまう。

そこで、永青文庫本のこの歌については、本行の本文をそのまま一首の歌本文として採用し、歌番号は、874・875 の両方を振ることとした。同様の事例は、永青文庫本 1094 番・1095 番にもある。

3-3. 表記規則の案出

伝本に見える墨付きすべてをデータに反映させるためには、以下の手順を踏まなければならない。

- A) 文字を読む。
- B) 音数律を読み取る。
- C) 本行と書き入れを区別する。
- D) 書き入れの位置を把握する。
- E) 書き入れの意味を解釈する。

その上で、得られた情報を、論理的に記述することが求められる。それは、人の目で見て解ればよいという次元ではなく、計算機処理が可能な表記規則である必要がある。

とはいえ、人間がデータを入力する際に、必要以上の負担を感じないような工夫はすべきであろう。表記規則は、伝本から読み取れるデータの「解釈」であって、具体的な事例の抽象化である。したがって、人間にも理解しやすく、かつ、入力ミスを極力抑制できるような表記規則であることが望ましい。

さらには、いったん策定した規則でも、常に修正と更新とが必要である。入力作業が進むにつれ、また、対象とする伝本を追加するたびに、想定外の例を見いだすことになる。その都度、表記規則を見直し、タグの問題点を修正することは避けられない。

そこで、現時点では、次のような表記規則によってデータを作成している。これにより、6 種の伝本については、ある程度の重要な情報の記述を可能にした。以下、その概要を示す。

基本的には、英数字と、“[]” “{}” “|” “*” を中心に用い、その他の記号を補助的に使用する。

A) 英字

英字には、次の三種類の機能を持たせる。

[位置] 書き入れの位置情報を示すもの

[よみ] 書き入れによって本行のよみを置換して異文を生成するもの

[位置][よみ] 上記の両方を行うもの

以下、その一覧を示す。

- t 行頭注 [位置]
本行の上部に付いた書き入れ
- T 行頭注 [位置][よみ]
表示は“t”と同じ、よみの生成もする
- d 行末注 [位置]
本行の末尾に付いた書き入れ
- D 行末注 [位置][よみ]
表示は“d”と同じ、よみの生成もする
- g 行間書き入れ [位置]
行間の書き入れ
- s 集付 [位置]
本行の上部に付いた歌集名・部立などの書き入れ
- S 集付 [位置]
本行の末尾に付いた歌集名・部立などの書き入れ
- r 右傍書 [位置][よみ]
本行の右側の書き入れ
- l 左傍書 [位置][よみ]
本行の左側の書き入れ
- f 補入 [位置][よみ]
脱落した文字の本行右書き入れ
- F 補入 [位置][よみ]
脱落した文字の本行左書き入れ
- m ミセケチ [位置][よみ]
見セ消チ記号の位置表示、よみの生成もする
- k 重ね書き [位置][よみ]
重ね書きされた下の文字
- c 擦り消し [位置][よみ]
擦り消された文字
- x 墨滅 [位置][よみ]
墨で消された文字
- h 圏点 [位置]
挿入・書き換え位置を示す点
- b 傍線 [位置]
文字に付いた傍線
- e 文字の除棄 [よみ]
書き入れの指示で文字を除棄する
- z 左注由来の異文 [よみ]
左注の内容からよみを生成する

B) 数字と括弧、および“|”(縦線)

数字は該当する句と、句中の何文字目かを示す。二種類の括弧“[]”“{}”と組み合わせて記述する。括弧の中を“|”(縦線)で区切り、縦線の前は表示位置、後はよみの置き換え箇所を示す。これを、先に示した英字と組み合わせて記述する。

以下、レコード7行目に記述する、歌に関する書き入れの例を示す。

(例) 2[3|4-6]r(桜|さくら)

第2句の3字目の右に「桜」の書き入れあり。

歌本文Bの第2句の4字目から6字目を「さくら」に置き換え。

ただし、“h” “f” “F” が関係する場合は、「当該字の後に」の意とする。

(例) 3[2]f{あ}

第3句の2字目の右下に「あ」の書き入れあり。歌本文Bの当該箇所に「あ」を挿入。

なお、このように、表示箇所とよみの反映箇所が同じ場合は、縦線とその後の内容を省略することができる。

その他、句をまたがる書き入れなど複雑な例があるが、ここでは割愛する。

3-4. 漢字と異体字の扱い

各伝本の表記は、仮名にしても漢字にしても、現代の通行字体とは異なる事例が多い。もちろん、これは周知の事実であるが、こうした資料のデジタルデータ化には、常に、どの文字で表記するかという問題がつかまとう。

たとえば、仮名の場合、現代の通行字体とは異なる字体が多く用いられるが、字母が「安」でも「阿」でも区別せず、「あ」とするのが通常処理であろう。仮名字母の研究をするのでなければ、それらを区別して記述する必要はないという判断である。

漢字に関しても、異体字関係にある字をすべてまとめて、同一の字体で記述しておく、という立場もありえよう。検索の便を考えると、さまざまな字体を想定する必要がなくなるという利点がある。しかし、漢字に関しては、字体の顕著な違いは、区別して記述しておくほうがよい場合がある。ある漢字の字体の違いが、表記から見る伝本間の近似性や、書写者の属する文化圏を示すということもありうるからである。

具体例を示そう。「声」という漢字は、「聲」とは異体字関係にあり、コード上でも区別して入力しておくのは容易である。ところがその一方で、

右に示すような字体、つまり最終画を左に払うのではなく、右に曲げてはねた形の「声」がある。これを通行字体の「声」と同一視して、一律に「声」と記述する立場もあろうが、伝本での出現箇所を見ると、その出現箇所に明らかな傾向が看取される。

最終画を右に曲げてはねた「声」は、内閣文庫蔵「江雲渭樹」印本の第五帖 2738 番歌以降、同本の第六帖に集中して分布する。しかも、この本とごく近い関係にあると思われる島原図書館蔵松平文庫本でも、同じ字体の「声」が、同様の箇所に使用されている。このような現象は、今後の伝本研究に何らかの示唆を与えてくれる可能性がある。そこで、「声」と区別するために「@声」と記述して差異を明確にした。

このように、漢字の異体字については、慎重に取り扱い、可能なかぎり字体を区別するという方針で、作業を進めている。

なお、使用する漢字の字体は、互換性を重視して、JIS X 2080 の範囲、すなわち第2水準までに今のところ限定している。そのため、第3水準・第4水準、またそれ以外の字体の漢字については、“@”との組み合わせ表記とした。たとえば、「秋」の異体字「𠂔」は頻繁に使用されているが、これも「@秋」と表記する。



内閣文庫蔵「江雲渭樹」印本
2738 番

4. 解析ソフトウェアツールの設計

今回作成したデータは、1レコード7行からなるテキストデータであるが、通常と異なり、以下の特徴をもつ。

- (1) 同じ作品についての複数の伝本である。
- (2) 書き入れデータを含む。

(1)に示されるとおり、伝本による異同をみるのが本データ作成の主たる動機の一つである。このために、各レコードには『新編国歌大観』による歌番号が付してある。検索結果などを表示する際には、基本的に、同じ歌番号をもつレコードを複数の伝本にわたって同時に表示することになる。しかし、① 同一の歌番号をもつレコードが同じ伝本内に複数存在すること、② 一つのレコードが複数の歌番号をもつこと、により、インタフェース

がやや複雑になる。いずれにせよ、これ自体に特に技術的な難しさはない。

(2)によって、以下の二つの機能が必要となる。

- A) 書き入れを忠実に再現したテキスト表示機能。
- B) 書き入れによって指示される異文を反映したキーワード検索機能。

A)は、影印をイメージデータとして画面で確認できることが理想であるが、権利面の問題から現実的ではない。したがって、どの程度影印に近い表示で折り合いをつけるか、という問題といえる。本研究ではこの機能の充実には深入りしない。

一方、B)は、非常に興味深い。書き入れによるテキストの異文の指示は、①文字列の挿入、②文字列の削除、③文字列の置換の3種類に分けられる。このうち②③は対象となるテキストの範囲の指示を伴うが、この範囲はネストすることがあるばかりでなく、ネストせずにオーバーラップすることもある。したがって、このような書き入れ指示をXMLなどのような括弧構造としてタグ付けで表現することはできない。

このようなテキストは、文字列処理の分野では、ハイパーテキストとしてモデル化されている[1]。ここでいうハイパーテキストとは、以下のように形式的に定義される。

【定義】ハイパーテキストとは、頂点ラベル付き有向グラフ $G=(V, E)$ で、頂点ラベルが任意の長さの任意の文字列であるものをいう。

さて、ハイパーテキストに対する文字列照合問題を解くことを考えよう。ハイパーテキストが DAG であるとき、すなわち、サイクルを含まないとき、ハイパーテキストの表現するテキストの集合は有限集合である。本研究で作成するデータに対応するハイパーテキストは DAG となるため、これを展開して通常のテキスト集合にして扱う方法が考えられる。しかしながら、この方法では、テキスト集合のサイズ(テキストの個数)が指数的に増大しうる。実際に展開してみたところ、データサイズは 100MB を超してしまった。したがって、このようなナイーブな手法は現実的ではない。

ハイパーテキスト上の文字列照合問題に関しては、次の結果が知られている。

【定理】 ([1]) ハイパーテキストに対する文字列照合問題は、 $O(N+m|E|)$ 時間で解くことができる。ここに、 N はテキスト長の総和、 m はパターン長とする。

[1]の手法は KMP 法に基づいており、DAG に限らず一般の有向グラフに適用可能である。しかし、

今回のデータは DAG であることから別の方法を採った。すなわち、パターンに対する NFA をビット並列化手法により実装[2]し、DAG の頂点をトポロジカルソートした上で順次動作させることにした。文字列照合に要する時間は、 $O((m/w)(N+|E|))$ である。ここに、 w はワード長を表わす。特に、パターン長 m が w 以下であるとき、計算時間は $O(N+|E|)$ となる。

以上述べたように、本ツールは歌番号による検索とキーワードによる検索の機能を持ち、キーワード検索では、検索結果の中からユーザがレコードを選択することにより、同じ歌番号をもつレコードが伝本ごとに表示される。その際、基準においた伝本と比較した歌の異同の有無が句単位で色表示される。

さらに研究者向けの機能として、基準と定めた伝本と比較した伝本ごとの異同のパターンごとに統計をとる機能なども順次整備している。

5. デジタル校本を用いた文学研究

5-1. 『古今和歌六帖』の本文研究

『古今和歌六帖』は約 4,500 首という多くの和歌を収めている。その上、類題和歌集であることから、一首一首の和歌の出典考証を行う必要もある。したがって、関連データは膨大な量にのぼり、しかも、相互に複雑な関係性をもっている。

本研究で開発しているデジタル校本は、二つ以上の諸本間において、本文異同の存する歌の数と具体例を表示することができる。

一例を示そう。『古今和歌六帖』諸本は、いずれも藤原定家所持本を源家長が書写・校合した本の系統であると考えられるが、詳細にみると、写本系と版本系に分けられることが、すでに指摘されている(注7)。そこで、写本系本文の桂宮本と、寛文九年版本との本行の本文を比較してみる——この場合は、和歌データにおける歌本文 B を分析対象とし、表記上の異同ではなく、歌の意味に関わる、語句の異なりをもつ歌を抽出した——と、明らかな脱字・衍字も含めて、異同を有する歌は全体の 30 パーセントあまりを占めることがわかる。

この機能は、『古今和歌六帖』諸本本文の全体像を把握するために、きわめて有効であろう。『古今和歌六帖』のような大部な作品を対象とする文学研究は、往々にして作品の特定の部分に着目して行われることがあるが、大まかな全体像を把握した上で個別の事象に向かうことは、研究視点の

客観性を保証するという点においても、重要であろう。

また、異同を有する歌のみを抽出・列挙するデジタル校本の機能を用いることによって、具体的な異文調査を能率的に進めることができる。前述の桂宮本と寛文九年版本との異同においても、1,400首あまりの異文のある歌を抽出した。その中には、次のような歌もある。

よも山を うちこえくれは かさぬひの
しまこき帰る たなゝしを舟 (桂宮本)
しはつ山 打越くれは かさぬひの
嶋こきかくる たなゝしをふね
(寛文九年版本)

これは、『古今和歌六帖』第三帖、1817番歌であるが、出典は、『万葉集』巻第三、272(274)番(注8)と考えられる。

四極山(シハツヤマ) 打越見者(ウチコエミレバ)
笠縫之(カサヌヒノ) 嶋榜隠(シマコギカクル)
棚無小船(タナナシラブネ) (注9)

初句の「四極山(シハツヤマ)」は、『古今和歌六帖』においては、寛文九年版本と一致するが、桂宮本の「よも山」も、『万葉集』の古写本である類聚古集・神田本に見え、細井本・京都大学本は、漢字表記の左に「よもやま」とある(注10)。とすれば、『万葉集』の古写本の本文と一致する桂宮本本文も、故なしとしないことになる。

ところで、古典和歌の本文を検索する際、今日一般に用いられるのは、『新編国歌大観』である。そこに収載されている『古今和歌六帖』テキストの底本として採用されたのが桂宮本であったことはすでに触れた。また、それ以前に、『古今和歌六帖』の本文検索をする場合には、『続国歌大観』が用いられたが、本文が、江戸期の流布本である寛文九年版本系統であることも、前述のとおりである。

『続国歌大観』と『新編国歌大観』とで、それぞれ「しはつやま」を検索すると、『古今和歌六帖』においては、各一首の、まったく別の歌が見出される。すなわち、『続国歌大観』では、寛文九年版本の系統の本文であるため、前掲の歌が検出されるが、桂宮本を底本とする『新編国歌大観』では、当然この歌は該当せず、第二帖1425番歌が浮かび上がる。

しはつ山 いはさかはかり われのれる
むまそつまつく 家こぬらし
(桂宮本)

しほつ山 打越ゆけは 我のれる
馬そつまつく 家こふらしも
(寛文九年版本)

ちなみに、この歌の出典も『万葉集』であり、以下のように、初句の本文は、寛文九年版本と一致する(注11)。

塩津山(シホツヤマ) 打越去者(ウチコエユケバ) 我乗有(ワガノレル) 馬曾爪突(ウマゾツマツク) 家恋良霜(イヘコフラシモ)

『万葉集』巻第三、365(368)番

したがって、この歌は、『続国歌大観』では、「しはつやま」と検索しても用例として出てこない。

『校本萬葉集』に拠っても、初句について、『万葉集』諸本に異同はない。『古今和歌六帖』の「しはつ山」(桂宮本)、「しほつ山」(寛文九年版本)の本文異同が、『万葉集』本文の揺れによるものではないとすれば、次には、「は」と「ほ」という平仮名字体の類似による可能性を疑ってみねばなるまい。『古今和歌六帖』諸本間には、第二句に大きな本文の対立があり、それも含めたさらなる本文の検討が必要であろう。

なお、『古今和歌六帖』と出典となる歌集との間には、複雑な本文異同が存在することがある。とくに『万葉集』を出典とする場合には、それが顕著になる場合が多い。そこで、文字列解析器 eCSA (efficient character string analyzer) Ver.2.00 (竹田正幸開発)の類似歌抽出機能を用いて、『古今和歌六帖』約4,500首すべての出典考証を行い、一通りの調査を終了している。両者のデータを組み合わせることにより、『古今和歌六帖』諸本の性格を知るための、より詳細なデータが得られる。

5-2. 『古今和歌六帖』の表現研究

(大伴宿禰家持更贈・紀女郎 歌五首)

野干玉能(ヌバタマノ) 昨夜者令還(ヨフベハ
カヘル) 今夜左倍(コヨヒサヘ) 吾乎還莫(ワ
レヲカヘスナ) 路之長手乎(ミチノナガテヲ)
『万葉集』卷第四、781(784)番

大伴家持が紀女郎に贈ったこの万葉歌は、『古今
和歌六帖』第五帖、3023番にも載っている。

むはたまの よは人はかへる こよひさは
われをかへすな うちのたま姫 (桂宮本)
うは玉の よむへは帰る 今宵さは
我をかへすな 道のなかくてを
(寛文九年版本)

『古今和歌六帖』における桂宮本と寛文九年版本
の結句の異同は甚だしい。だがここでも、出典の
万葉歌と本文が一致するのは、寛文九年版本であ
る。

一方、桂宮本の結句「うちのたま姫」の例は、
『新編国歌大観』を検してもきわめて少ない。だ
が、先行例として、『古今和歌集』異伝歌を挙げ
ることができる。

さむしろに 衣かたしき こよひもや
我をまつらむ うちのたまひめ
又は、うちのたまひめ
『古今和歌集』卷第十四恋歌四、689番(注12)

ここで想起されるのが、『古今和歌六帖』に収
められた『万葉集』卷十二の歌で、異伝注記のあ
る歌は、すべて異伝歌が採られているという指摘
である(注13)。当該歌では、桂宮本の結句のみのこ
とではあるが、『古今和歌集』の異伝歌に共通す
る歌語を用いていることは、きわめて興味深い。

ところで、「うちのたまひめ」は、『古今和歌
集』では、男性が通ってくるのを待つ女性のイメ
ージである。ところが、『古今和歌六帖』の場合、
題は「くれとあはす」であり、男性の来訪を拒絶
する女性を描く。そもそも、この歌は紀女郎にあ
てた歌であるが、「うちのたまひめ」と紀女郎とを
特に結びつける要素は、今のところ見出せない。
とすれば、ここは、『古今和歌六帖』桂宮本が、『万
葉集』の詠歌状況から離れ、さらに、『古今和歌集』
異伝歌の歌語を用いながら、そのイメージからも
脱して、新たなる「うちのたまひめ」歌の世界を
構築しようとした結果生まれた本文を掲載したと
見られよう。

では、桂宮本の本文は、いついかなる事情で生
まれたのか。この点は、にわかには決しがたいとこ
ろではある。だが、出典と見られる万葉歌の結句
に比し、これほどまでの異文が生じているという
ことは、やはりそこに、偶然ではない意図的な作
為が働いたのではなかったか。

歌語をめぐるこのような模索の跡は、十世紀後
半から十一世紀において見られるところである(注
14)。『古今和歌六帖』編纂時に、当該歌が、桂宮
本本文のかたちですでに流布していたのか、ある
いは、『古今和歌六帖』編纂時の本文改変であつ
たのかは即断し難いが、当時の和歌表現の特色を
示す事例として、留意しておくべきなのではない
だろうか。

6. 今後の課題

現存する伝本は、その本がいったん書写されて
から、さらに文字が書き入れられ、あるいは摺り
消されて今日に至っているものが多い。また、そ
の親本が、どのような本の写しであったのか、明
確であることのほうが稀である。

そのような状況にあつて、諸本の墨付きすべ
てを、本行と書き入れという階層に分け、検索す
るのみならず、諸本間の異同のパターンによつて、
用例を抽出するデータマイニング機能を開発する
ことは、実証的な文学研究に寄与するところきわ
めて大であろう。

ただし、伝本の原態を機械可読化するためには、
伝本によって性格の異なる、様々な事象に対応し
ていかなければならない。それまでに定めた表記
規則にあてはまらない要素が見出された場合は、
新たなタグを付け加えるか、あるいは、既存の表
記規則の枠組みを変更することになる。

たとえば、朱筆をはじめとする書き入れの色情
報についても、今後、電子テキストに盛り込む必
要がある。だが、この点については、新たなタグ
を拡充することにより、比較的容易に対応でき
てであろう。

また、和歌本文を一行書きにしているか、それ
とも二行書きかという点は、伝本研究の際に、か
なり重要になってくることがある。

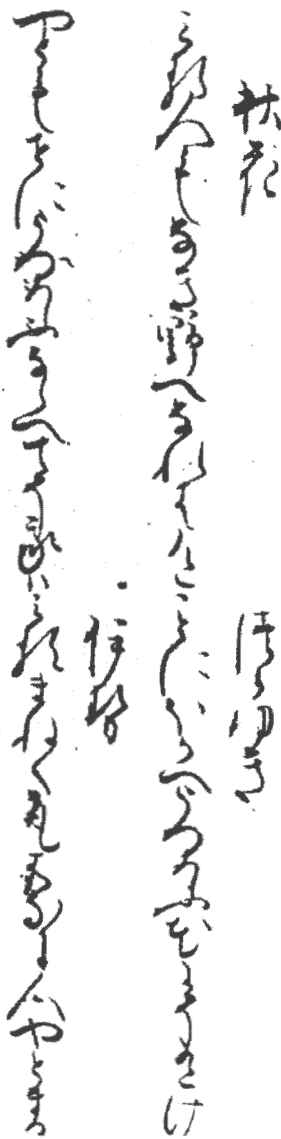
次ページの影印は、桂宮本の第六帖、4057・4058
番の歌である。以下に本文を示すと、次のように
なる。

秋花 つらゆき
みる人も なき野へなれば 色ことに

ほかへうつろふ 花にそ有ける(4057番)

伊勢

やともせに うつろふならへてそ 我はみる
まねく尾はなに 人やとまると(4058番)



桂宮本 4057・4058 番

なお、4058 番歌、第二句の見せ消チ一文字目の右横には、「へ」という傍書がある。見せ消チと傍

書をあわせると、第二句は「うへならへてそ」という本文になる。

4058 番歌が、第二句を誤って「うつろふ」と書写してしまった原因を考える際に、この歌の直前に配されている 4057 番歌の第四句「ほかへうつろふ」に目移りしてしまったのではないかという推定は、それほど的外れではないだろう。そして、この桂宮本の親本が和歌二行書きだったとすれば、4057 番歌の第四句と 4058 番歌の第二句は、まさに隣り合わせの位置に書写されていたことを想定しうる。このようなアプローチを可能にするためには、和歌の書式は、ぜひデータ化したい情報の一つに数えられよう。

さらに、現存『古今和歌六帖』には収載されないが、他の歌集や歌論書に『古今和歌六帖』歌として載っている歌もある。たとえば、山本明清校注『古今和歌六帖標注』(1831 年成、1832 年刊)には、「古今六帖拾遺」として、47 首というまとまった数の歌を列挙する。現存『古今和歌六帖』に、少なからぬ歌の脱落があるとすれば、その復元のために(注 15)、それらのデータも、今後、増補していく必要があるだろう。

デジタル校本は、いったん校本画面を構築した後も、伝本の入力データの変更・増補をおこなうことができる。校本を用いて研究を進めながら、データの質の向上と充実を図ることが可能である点、紙媒体での従来の校本とは一線を画すといえるであろう。今後も、デジタル校本の枠組みの構築とその整備に努めると同時に、文学研究に活用していきたい。

註

- (1) 近年においては、真野道子氏「定家の源氏注釈における万葉歌」(『中古文学』第 78 号、2006 年 12 月、pp. 69-82)をはじめとする論考がある。
- (2) 『新編国歌大観』古今和歌六帖解題(橋本不美男氏・相馬万里子氏・小池一行氏)。
- (3) 以下、本書の引用は、宮内庁書陵部蔵桂宮本の影印紙焼資料に拠る。
- (4) 上・中・下・研究編、全 4 巻。昭和 35 年 3 月・9 月・12 月、昭和 36 年 10 月刊、風間書房
- (5) 文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業(オープン・リサーチセンター整備事業)「人文科学におけるマルチメディア情報通信技術の教育利用に関する共同研究」、2008 年度早稲田

大学戸山リサーチセンター個別研究課題「オンデマンド授業システムの共同研究基盤への応用研究」研究成果(申請者・早稲田大学文学学術院兼築信行氏)。

- (6) 科学研究費補助金基盤研究(C)「文字列データ解析システムの構築と平安中期歌語生成に関する研究」(2007年度～2009年度、課題番号:19500217、研究代表者:福田智子)による研究成果の一部である。テキスト作成作業には、研究分担者(連携研究者)および研究協力者にご尽力いただいた。
- (7) 『図書寮叢刊 古今和歌六帖』下巻「古今和歌六帖」解題、321ページ参照。
- (8) 『万葉集』の歌番号は、旧番号(新番号)の順に示した。
- (9) 以下、『万葉集』本文の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。
- (10) 『校本萬葉集』による。なお、京都大学本は、緒のカタカナ表記。
- (11) 寛文九年版本の本文が『万葉集』本文と一致する場合は多い。版本が、出版に際し、『古今和歌六帖』本文を整備したであろうことは、富永洋子氏「古今和歌六帖の研究—細川家永青文庫本及び松平文庫本を中心として—」(『国語と国文学』第42巻1号、1965年1月)、岸上慎二氏「古今六帖本文覚え書—写本の形による読みⅡ—」(『語文』〈日本大学国文学会〉第67号、昭和1987年3月)などによって、その可能性が指摘されている。
- (12) 『古今和歌集』本文の引用は、『新編国歌大観』に拠る。
- (13) 新沢典子氏「古今和歌六帖と万葉集の異伝」(『日本文学』〈日本文学協会〉第57巻第1号、2008年1月)。なお、『古今和歌六帖』本文は、桂宮本に拠る。
- (14) 福田智子「平祐挙の和歌—一条朝和歌の一側面—」(『和歌文学研究』第75号、1997年12月。後に『平安中期私家集論—歌人・伝本・表現—』(2007年2月、勉誠出版)では、「うちのはしひめ」から「吹きではまのはまひめ」という語句が生み出された可能性を指摘した。
- (15) 黒田彰子氏「古今和歌六帖と和歌童蒙抄—古今和歌六帖本文の復元をめざして—」(『愛知文教大学論叢』第12巻、2009年11月)他の論がある。

参考文献

- [1] A. Amir, M. Lewenstein, and N. Lewenstein. Pattern matching in hypertexts. *J. Algorithms* 35(1):82-99 (2000).
- [2] G. Navarro and M. Raffinot. *Flexible pattern matching in strings: practical on-line algorithms for texts and biological sequences*. Cambridge Univ. Press, 2002.

謝辞

資料をご提供くださった宮内庁書陵部・永青文庫・国立公文書館・肥前島原松平文庫・ノートルダム清心女子大学付属図書館、および国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

附記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「文字列データ解析システムの構築と平安朝文学の伝本と表現に関する総合的研究」(課題番号22500236、平成22～24年度)における研究の一部である。